

精読と多読を併用した読みの指導

—「読むJ941」授業報告—

高橋 純子

要 旨

本稿は、2010年1～3学期および2011年1学期の4学期間の「読む941」の授業を概観する。本授業は中級後半および上級レベルの日本語学習者を対象とするが、受講生の日本語力には幅がある。学習者の読む力を伸ばす試みとして授業内で行う精読教材に加え、その読み物の背景知識、関連情報を収集し、授業内で発表するという多読を促す活動を試みた。精読の読み物に関しては内容理解を確認するワークシートを作成し、学習者の正確な理解を確認し、文中で学んだ語彙・表現などの定着、それらを使えるようにする目的で読み物毎に小テストを作成し、実施した。さらにより深い理解を促すため読んだものに関して学習者に考えさせ、意見・感想を交換し、要点を1分間で簡潔に述べる練習を行った。また、ある読み物の構造、文体を模倣し、類似の作品を創作するという活動も試みた。音読練習は正確な発音イントネーションの確認と矯正に効果的であった。

【キーワード】 精読と多読 意見交換 小テスト 模倣と創作 1分間スピーチ
音読練習

Japanese Reading Instruction using Intensive and Extensive Reading for Upper-Intermediate and Advanced Students

TAKAHASHI Junko

【Abstract】 This is a report on a Japanese reading comprehension class for upper-intermediate and advanced students, whose proficiency in Japanese varies. In order to enhance their reading abilities, the author required students to collect information related to the main texts used as the intensive reading materials, and also to make presentations sharing with their classmates the knowledge they collected. The author used worksheets to check the students' correct comprehension and small tests to help the students memorize the vocabulary and new expressions in the main texts, and use them properly. The students exchanged their ideas and were asked to summarize the text in one minute presentations. They were also asked to create original dialogues that resembled a particular text they had studied. Reading aloud practice was effective for accurate pronunciation and intonation.

【Keywords】 intensive and extensive reading, discussion, small tests, imitating and creating writing, one minute speech, reading aloud practice

1. はじめに

筑波大学留学生センターの日本語補講授業では100から始まり900レベルまでの授業が用意されている。「読む900」のクラスが対象とする学習者は、留学生センターの日本語補講コースの各レベル（100～800）を経て進級してきた者と、自国などで日本語を学びプレースメントテストにより、このレベルに配置された学習者が混在する。過去に既に日本への短期留学経験のある者や、日本語、あるいは日本語教育が専攻の学習者で、日本語運用力だけに留まらず、日本社会、文化に関する背景知識の豊富な学習者もいれば、主に留学生センターの日本語補講コースで進級を重ねてきた学習者もいる。900レベルのクラスは最上級に位置しており、これ以上の進級はないため、受講生の日本語力は幅が広い。

本授業では「読む」能力の育成を図りつつ、「話す」「聞く」「書く」の技能を相互に関係づけ、そして統合していくといった指導法を試みた。このレベルになると学習者は、自ら様々なジャンルの読み物を楽しみとして読む、あるいは、研究のため、様々な資料、専門書を必要に迫られ読んでいる。そのような学習者が、同じ読み教材を共有し、意見・感想を交換し、互いに切磋琢磨する場を設けたいと考える。読むという作業は、読む対象のテキスト、あるいは、著者との対話、コミュニケーションでもあるが、授業という場であれば、それは一緒に読む仲間との対話、コミュニケーションへと広げることができる。そのために、表現する力、口頭表現能力、書く能力を十分に使うような授業を設計した。学習者同士の相互作用がさらに深い読み、あらたな視点からの読みへと発展していくことになるであろう、という意図からである。

2. 受講生

各学期の受講生の内訳は次の通りである。

1. 各学期の受講生数と国籍

2010年度-1学期	8名	中国3名、韓国2名、インドネシア2名、チェコ1名
2010年度-2学期	8名	中国3名、韓国1名、台湾2名、インドネシア1名、ポーランド1名
2010年度-3学期	7名	中国1名、韓国4名、台湾1名、香港1名
2011年度-1学期	6名	中国2名、韓国1名、タイ2名、ブラジル1名

「読む800」から進級してきた学生は2010-1学期は3名、他の学生はプレースメントテストで900レベルに配置され、「読む」の授業に登録した。中には過去に（2006年度）筑波大学に日本語・日本文化研修生として留学した経験を持つ者がいた。

2010-2学期は、継続して受講した学生が1名、「読む800」からの進級者が1名、他の6名は新規の登録であった。

2010-3学期は、継続して受講した学生が1名、聴講生として継続した学生が1名、他は「読む800」からの進級者であった。

2011-1学期は、全て新規に登録した学生で、その中に1名過去に（2009年）筑波大学に日本語・日本文化研修生として留学した経験を持つ者がいた。

このように受講生の日本滞在経験、日本語使用経験、文化・社会に関する背景知識などには幅があり、同じレベルに配置されてはいるが、その全般的な日本語力は同じではない。各学期、上級レベルと中級後期のレベルの受講生が混在していた。

3. 教材の選択と配置、および小テスト

主教材と副教材を用意した。これは、精読を目的としているか、多読を目的としているかで筆者が区別しているものである。主教材として精読を目的とし、読解教材化したものには、内容理解を促すワークシート、小テストを用意し、一セットとした。ワークシートには、内容理解を問う質問や教材に出てくる表現を使った例文などが書かれており、小テストは、漢字の読み方、語彙・表現の使い方、意見・感想を問う質問が並び、A4一枚に収まる程度の量である。小テストは、一つの読み物を読み終わると翌週実施した。主教材となる読み物は、一つのテーマにつき3点ぐらいの異なる視点の記事、読み物を用意した。例えば、2010年に起きたチリ落盤事故に関しては、事故そのものを伝える記事だけではなく、識者の意見を綴ったエッセイ風の意見記事、事故の映画化、それに伴う様々な人間模様に関する記事など数点を集めた。同様に2011年3月11日の地震・津波・原発事故に関しても、原発の安全対策に対する批判的意見記事、芸術活動を自粛する風潮に対しての意見記事、朝日新聞天声人語など、1つのテーマに関して複数の読み物を用意した。

副教材というのは、読み切りで、読んで情報を得て、各自が意見・感想を述べると言った形で使用するものである。毎回何か新しい情報を活字から得ることが目的の読み物である。学期毎に異なるが、たいていはシリーズものを使用した。75分の授業のだいたい10～15分をあてた。シリーズものを選んだのには、授業のリズムを作るためという理由がある。授業のはじめに、いつもの読み物、という習慣を形成しようと考えた。シリーズものの内容はかなり奇抜であるが、それを毎週、今回はどんな内容か、と皆で期待しながら読むという環境を作りたいと考えたのである。1つの文体に慣れ親しむという体験を通して、学習者が「いつものあれ」といった共有体験と一体感を持って臨むことができればいいと考えた。

1学期、2学期と継続して受講する学習者がいるため、学期毎に教材のジャンルをはじめ、主教材としての読解教材のテーマも変えた。具体的には、2010年1学期は、新聞記事を中心に、2学期は新書からの抜粋、雑誌・新聞の特集記事を使用し、関連のテレビ番組のビデオ録画も併用した。2010年2学期は南米チリで落盤事故が起こり、地下深く坑内に

閉じ込められた鉱山労働者全員が救助されるという世界の注目を集める事件もあり、上述のように、その関連新聞記事を使用した。3学期はクリスマスの日が舞台となる小説を読み、正月の福袋商戦や、就職関連の記事をいくつか読んだ。2011年度1学期は婚活に関する新聞記事、そして3月11日の震災に続く、津波、原発事故に関連した記事を読み、最後は夏目漱石の短編を読んだ。これらが精読教材の主なテーマで、その学期の注目を浴びたニュース記事を中心に取上げた。

副教材としては、2010年1学期は、雑誌の連載記事「食べる本能」から4点を読んだ。2学期はブータン王国に関する雑誌記事の一つを精読の主教材とし、関連する新聞記事を副教材とした。3学期は、第一生命が毎年発表しているサラリーマン川柳を副教材として使用した。2011年1学期は、朝日新聞愛読者向けの雑誌『スタイルアサヒ』からシリーズ「家電の告白」を読んだ。詳細については、後述5を参照されたい。

4. 読み物に関する常識的、背景的知識情報収集とその発表活動

主教材の読み物に関する背景的知識、関連知識などの情報を学習者に収集させ、発表させた。その目的は、日本語学習歴、日本語力、日本文化・社会に関する知識や経験も異なる学習者に背景知識を調べることにより、できるだけ同じスタートラインにつかせようということが1つである。また、教師の側から説明するより、学習者自身が調べ、それをクラスメートの間で共有する方が定着がよさそうだと判断したためである。実際、学習者たちは、他の学習者の質問にもよく答えられる十分な準備をしていた。その結果、当該の教材を読むための新出語彙は学習者の情報収集で、ほぼカバーできていたと言える。情報収集活動の例は以下の通りである。

例1：2010年1学期に使用した朝日新聞のシリーズ記事「探嗅」は臭いにまつわる事象を様々な視点から取り上げたものである。その一つで発酵学者小泉武夫氏のインタビュー記事「人間くさくなろう」に出てくる「鮎寿司」、「くさや」に関して調べてくるという課題を与えた。調べたからと言って、知識のみでなかなかその実態に迫ることはできないが、今後の学習者の生活経験の中で、このような食品に遭遇し、その時に「ああ、これがいつか調べた〇〇というものか」と興味を持って、実体験へとむすびつくこともないとは限らないであろう。

例2：主教材として幸せ指数を重視する「ブータン王国」に関する雑誌記事を取り上げた。この記事の他にも新聞記事を副教材として使用した。読み物に入る前に、学習者はブータン王国に関して調べ、発表した。受講生の一人の友人がその年にブータンを旅したという偶然も重なった。その学習者の友人からの情報を共有したことで、ブータン王国が身近に

感じられた。さらにテレビ番組「世界不思議発見」(TBS)でブータンを取り上げた回を録画したものを教室で視聴した。画面に新聞記事に書かれていた通りの村の風景が広がっていることを確認した。また記事には書かれていなかった古民家を改造したモダンで豪華なリゾートホテルも映像は見せており、記事が紹介するのどかなばかりのブータン王国ではないことを知ることができた。ブータン王国は長い間鎖国政策をとっていたのだが、それに関連して日本の鎖国時代について、その状況と理由を調べさせた。知っているようで実は知られていなかった歴史上の事柄であった。そして、中国も鎖国政策をとった時代があったことを発表する学習者や、ブータンに関連して世界の小さい国(面積)を調べてきた学習者もいた。

例3：茶の湯の心を通して「とらわれない心」を説明した文章を読む前に、茶の湯に関して情報収集を求めたところ、学習者の発表は、教材に出てくる背景知識をほとんど網羅しており、本文で説明することなく、読みながら学習者の調べてきた情報を確認していくことができた。

例4：各国の結婚事情について調べさせたところ、それぞれの国の事情が見えてきた。そして、読みの教材に書かれている男女別未婚率や、晩婚傾向などが既に学習者の調査によって詳しく共有できた。しかし、親が子どものために婚活をすること、つまり親同士が見合いをするという現象は予想できなかったようだ。新たな情報となった親の婚活は、その後の意見交換を活発にした。

5. 多読用の副教材と創作活動

副教材としての読み物はほとんどシリーズものを使用し、読み切り、その場で読んで終わるといった内容のものにした。副教材として選んだ読み物の特徴は、内容とともにその独特の文体にある。

2010年1学期に主教材として使用した朝日新聞の探嗅シリーズ「人間くさくなろう」の記事では、臭い食品として世界的に知られているシュールストレミング(スウェーデンの魚の缶詰)が紹介されていた。筆者の購読している雑誌の連載記事「食べる本能」でその缶詰が紹介されていた。それを参考情報として授業で使用したのがきっかけで、食品の写真がA4 1ページの半分を占める連載記事を毎回読むことにした。毎回珍しい食べ物を紹介する内容で、読んで新たな情報を得て「へえ、こんなものがあるのか」と驚くのだが、読むことで情報を得、世界を広げるという読みの基本的働きを重視する意図で使用した。毎回珍奇な食べ物を紹介し、その由来、味や触感などを描写している。その表現は豊富で、奇抜なものもある。味に関する様々な表現は学習者の興味を引いたようである。例えば、

いかに臭い食べ物であるかを紹介する「シュールストレミング」の回では、その臭さを「甘ったるく、濃厚でとてつもなく重たい臭気。臭いという棍棒で殴られた気分だ」と表現し、さらに「ショートケーキとくさやをかき混ぜて、1ヶ月ぐらい発酵させたような臭いなのだ」と続く。熊肉を扱った回ではサブタイトル「舌の上で獣の叫びを聞いた」という表現から始まり、中華料理の八珍料理にも話題が広がり、中国人学習者が八珍料理について翌週調べてきて、他の学習者に情報を伝えていた。トルコのお菓子「バクラバ」がいかに甘いかを紹介した回では、甘さを表す表現も独特であったが、なぜこれほど甘いお菓子がよく食べられているのかという歴史的説明も加えられている。毎回の記事に誘われ、学習者のそれぞれの国の珍しい食品の紹介にも発展し、授業のウォーミングアップとしての役割を果たした。「いるか」を扱った回では、ちょうど日本のイルカ漁を題材にした映画「コブ」が話題になっており、賛否両論意見交換の題材としても役に立った。

第一生命が毎年募集し、ベストテンを決めている「サラリーマン川柳」の中から40句を選び、副教材とした。読めばすぐわかる「減っていく、年金、ボーナス、髪、愛情」という句からリストラを扱った「やめるのか息子よその職俺にくれ」など、教師からの時代背景説明が必要なものもあったが、学習者同士で解説することで口頭表現の練習に役に立ったと考える。そして、五七五のリズムを体得するのにも貢献した。皆で声を合わせて五七五のリズムで読むことで、動詞「する」のアクセントなど、学習者が日常的に癖になっている誤ったアクセントに気づかせ、その訂正を促すよい練習になった。

朝日新聞小雑誌『スタイルアサヒ』連載記事「家電の告白」のシリーズからは、第1回目「冷凍室と野菜室」、第2回目「スマートフォンと携帯」を使用した。この読み物の面白さも内容とともに、対象となる製品の特徴をよく捉えた記述にある。第1回目の「スマートフォンと携帯」を先に使用し、ダイアログの特徴、話しの展開を鑑賞した後、各自に「冷凍室と野菜室」という題材で創作活動をさせた。

6. 原作を模した創作活動

2011年1学期に副教材として選んだ朝日新聞購読者向けの小雑誌『スタイルアサヒ』のシリーズ「家電の告白」の記事を創作活動としても使用した狙いは、文章全体の構造を把握し、製品の特徴と現代社会の傾向、風潮をうまく盛り込んだ微妙な笑いを誘う要素を学習者が理解できているかどうかを知るため、少なくとも笑いを誘う微妙なニュアンスの発想を学習者がどの程度把握したかを見るためであった。反対に、教材のスタイルを模倣することで、いつもは考えつかなかった発想ができるかもしれない、という可能性を見いだそうと考えた。このややユーモラスな文体を理解し、その型を真似ることで文体の学習にもなるであろうと考えたのであった。

結果は、学習者は、それぞれ、冷凍室と野菜室の冷蔵庫内における位置、役割、消費者

の食生活の傾向などをうまく盛り込み、会話を創作してきた。どれも記事の特徴である微妙な笑いのつぼをうまく捉え、笑わせどころのある傑作であった。例えば、野菜室は最近ほとんど使われなくなってきたことをぼやいている。何故かという、冷蔵庫の持ち主は、最近野菜はほとんど冷凍野菜で済ますという。そして、冷凍庫は、フル操業で満杯になっているという。ピザ、餃子など冷凍食品で一杯なのだそうだ。このような受講生の作品をまとめ、後の授業で観賞するという活動も行った。

7. 小テスト

小テストは各読み物に出てくる漢字語彙の読み、表現の意味理解の確認と短文作り、場合によっては各自の考えを書くという内容のものである。考えを述べる質問以外は、読み物の内容理解質問はなく、ごく表面的な言語知識の確認テストである。考えを述べる質問では、授業内に発言しきれなかったことなどを述べる機会を設けたものである。漢字の読み質問では、長音短音、清濁音、促音、発音、ナ行とラ行の間違いなどを毎回の小さい積み重ねで少しでも学んでいければと言う意図で作成、実施した。そして、確かに清濁音、促音の不正確な解答を訂正するのに役に立った。

8. 音読練習

このレベルの授業では音読の一斉練習はまれであろう。使用している教材も音読練習に適切とは言えない。黙読が中心ではあるが、それでも学習者に音読をさせるのは、小テストでの漢字の読み方のテスト結果による。中国、韓国の学習者が多いせいか長音短音、清濁音、促音、発音の間違いがいくつかある。学生の発言を聞いていると、その意味、意図が不明になるほどの発音、アクセント間違いではないが、筆者が母国語話者として聞いていると学習者の意図した意味の漢字ではなく、他の漢字変換をして聞いてしまうことが多々ある。例えば、報酬と言いたかったのか、補修と言いたかったのか、恐縮するのか、凝縮するのか、文脈から推察できないわけではないが混乱を招く。小テストで正しい表記を確認し、音読で正しい発音に学習者自身が注意を払う姿勢を身につけるように促すためでもある。学習者は、日常生活で日本語でのやり取りにほとんど苦勞することがないため、周囲の人々も小さな間違いや不正確さは聞き流し、間違いを直してくれる機会も少ない。正確さを高めるために小さい努力の積み重ねは欠かせない。音読練習にそのための一助としての役割を考えている。

語句の区切り方、漢字の読み分け、読み方の速さなどから学習者がどの程度の理解をしているかが大体掴める（1988石田）、と言う。このレベルの学習者は、アクセントの自己修正ができる。読み進んでいくうち、文の区切りが悪く、アクセントを間違えたことに気がつくとも自己修正できる学習者がほとんどだ。しかし、流暢な読み手の理解が必ずしも深い

理解につながるわけではないのと同様、発音に癖があり、たどたどしく聞こえる読み手であっても、内容理解においてすぐれた読み手であることがある。実際そのような学習者が見られた。

9. 1分間スピーチ

読んだものに関して、意見・感想を述べると言う口頭表現練習では、1分間スピーチを採用した。まず最初に学習者に自身の口頭表現の問題点など考察してもらい、それを聞き出した。上級レベルの学習者であっても常に向上したいという意欲を持っており、レベルが進めば進むほどにさらに高度な表現力を身に付けたいと思っていることが伺えた。発音が滑らかでない、語彙が足りない、話すスピードが遅い、話していると文法が不正確になる、などの意見が聞かれた。筆者は以前から、上級レベルの学習者になるに従って、話しの無駄や繰り返しが多くなり、簡潔に話すというところが弱いと観察していた。これは、より多く話したい、という学習者の意欲の現れとも考えられる。しかし、手際よく、聞き手に意図をはっきり伝えることが肝要だ。また、貴重な授業の時間に、指名されてから考えるという学習者もいる。確かに質問されて即答できないような類いの質問もある。そのような時には「考えてみてください」と言いい、しばらく時間を与えるのだが、それでも指名されてから、「ええと…」と考えながら話す学習者もいる。このような待ち時間に結構時間をとられるような印象を持っていた。

そこで、他の授業（日本語・日本事情科目「演習2」）で話す練習として取り入れ、学習者に練習を促していた1分間スピーチを「読む」の授業でも取り入れてみた。まず、簡潔に話すことの大切さを皆で考え、齊藤孝氏（齊藤 2009）の勧める1分間スピーチの概要を伝え、実際に練習をしてみた。1分という時間感覚を身につけるため、読んだものの要点のメモをとらせ1分で要約する、という練習から始めた。準備の時間を3～4分与え、メモを取り、その後、教師がストップウォッチを使い「スタート」「終了」と学習者に時間を知らせ、学習者は1分間各自小声で話す練習をする。1回目の練習で長過ぎたところ、短すぎたところを調整し、2回目の練習に入る。3回目では学習者を指名し、話させる、という手順で行った。この練習を1セット行っても5～6分ほどである。その後、1人1人話させるが、ほとんどが1分前後でまとめるので無駄な待ち時間を感じなくて済む。さらにいいことは、学習者が指名されてから考えながら話すことがなくなり、すでに2回ほど練習してあることを話すので、内容がまとまっていて、濃いのである。要約から、さらに発展させ、意見記事では著者の主張とその根拠、小説の場合は登場人物の心情、ブータン王国関連の読み物では「あなたの考える幸せの定義」など抽象的な質問に対して、考える時間を与え、1分間でまとめよ、という指示を出す各自熱心に取り組む姿勢が見られた。一般的に自己主張のはっきりした学習者が多いのだが、その長所を伸ばすいい手段だ

と筆者は考える。各自が個別に準備したスピーチであるから他の学生と同じ意見になったとしても、同じです、で済ますことなく、各自が口を開くことができる場所も利点であろうか。この練習を初回に行っておくと、後の授業では1分間スピーチの枠で話すことが習慣になり、授業の進行がスムーズになる。

10. 表面的読みと運用能力の高い学生の読み

優れた読み手と言うものは、予備知識を含む非視覚的情報とそこから得られる予測を大幅に活用して文章全体の流れを掴み、一文一文に書かれていない情報、非視覚情報を文章から酌みとっていきとされている。非視覚情報としての常識的、背景的知識、様々な文体の文章に触れた経験などの違いが授業での読みに現れるのである。優れた読み手は「予測」を最大限に利用して読み、読書経験の多い学習者ほどこの予測読みを上手に活用している。読む900の学習者におけるレベル差は、まさにこの点にある。もちろん中級後期ないし上級のレベルであるので、語彙、文法は、かなりの力があるのだが、数名の学習者には、視覚的情報、書かれた文字に多くを頼る傾向が見られる。これは数回の授業では解決できない課題である。授業で、読み物に関する常識的、背景的知識を調べさせたのは、非言語的情報の活用を促す目的である。

優れた読み手がしばしば簡単な漢字や言葉を誤読することがある。全体の文章把握には支障がない場合が多いが、知っていて当然のような言葉、漢字の読み間違いが起こるのは、本人のせっかちな性格もあるかもしれないが、逐語的に言葉を追って読んでいるのではなく、文章のより広い範囲を捉えて読んでいることがその理由であろう。既習の連語、言い回しの知識と照合し、それと認識してしまった結果のようだ。

11. 今後の課題と発展

900のレベルの受講生は、高度なレベルの読み手ではあるが、上述したような差がある。授業は優れた読み手を育てることが目的である。受講生の読解力をどのような基準をもって正当に評価すべきか、が課題となる。どのように予測を働かせ、言外の意をどのように汲み取ったのか、など非視覚的情報をどのように活用したのか、を観察し、記述していく作業が教師に必要とされるのではないだろうか。その上で評価の方法、テストの妥当性などを検討することが求められるであろう。

さらに、教材が適切であるかどうか、受講生の日本語力、知的水準に適しているのか、さらに読み進めていきたいという好奇心をそそるものであるのか、読むことだけが目的になっていないか、読んだことで何を得られたのか、など基準を設け教材を評価し、吟味していくことも求められる。

本授業では「読む」能力の育成を図りつつ、「話す」「聞く」「書く」の技能を相互に関

係づけ、そして統合していくといった指導法の試みを報告したが、次の段階として、その目標にかなった受講生の評価の方法、教材の選択と吟味の基準について考察を進めていきたいと考える。

参考文献

- 石田敏子 (1988) 『日本語教授法』 大修館書店
- 齊藤孝 (2009) 『1分で大切なことを伝える技術』 PHP新書
- 天満美智子 (1989) 『英文読解のストラテジー』 大修館書店
- 北條淳子 (1973) 「上級クラスにおける読解指導の問題」 『日本語教育』 第21号
- 北條淳子 (1982) 「読むことの学習段階」 『日本語教育事典』 大修館書店
- 北條淳子 (1990) 「読解の指導」 『日本語教育事典』 大修館書店
- 茂住和世・足立尚子 (2004) 「クラス授業で行われる音読に対する教師の目的意識～外国語学習者に対する日本語教育現場での調査から」 『東京情報大学研究論集』 Vol.8 No.1 : 35-44

参考資料

各学期の読解教材と活動は以下の通りである。

	精読教材	多読教材	情報収集活動 創作活動 その他
2010年1学期	<ul style="list-style-type: none"> ・「朝、予定表を作りなさい」(外山滋比古著 朝日新聞朝刊2008年4月1日付け) ・「母と子 においの絆」(シリーズ探嗅 朝日新聞朝刊2010年1月1日付け) ・「人間くさくなろう」(シリーズ探嗅 朝日新聞朝刊2010年1月1日付け) ・「電車のマナー」(朝日新聞朝刊2006年6月18日付け) ・「一触即発の公的空間」(朝日新聞朝刊2007年5月29日付け) 	雑誌Link Club Newsletter シリーズ「食べる本能」から ・シュールストレミング(スウェーデンの魚の缶詰)(2008年12月号 Vol.162) ・バグラヴァ(トルコの甘い菓子)2009年5,6月号 Vol.164 ・イルカの肉(日本)(2010年春号 Vol.168) ・おたぐり(馬のモツに込み日本)(2008年4月号 Vol.154)	<ul style="list-style-type: none"> ・鮎寿司、「くさや」について調べる。 ・イルカ漁と映画「コープ」に関して調べる。
2010年2学期	<ul style="list-style-type: none"> ・「落下の風情にみる、とらわれない自由な心」(ひろさちや 阿純孝著『般若心経の教える幸せになるための智慧』ソフトバンク新書) ・ブータン王国(雑誌Link Club Vol.162) ・チリ鉱山での落盤事故関連の複数新聞記事 「33人全員救出」 「救出劇 歓喜の幕」 「ヒーロー争奪戦」 「世紀の救出」総力戦 (以上、読売新聞夕刊2010年10月14日付け) 社説 歓喜の生還の後は安全対策を(読売新聞朝刊2010年10月14日付け) 終わりと始まり 職業の誇り「鉱夫」はどこへ行ったか 池澤夏樹著(読売新聞夕刊2010年11月2日付け) 	幸せの国ブータン(上)「環境文化も指標化」(読売新聞朝刊2007年10月25日付け) 幸せの国ブータン(下)「若者に明るい未来像」(読売新聞朝刊2007年10月27日付け) どんな国?ブータン つましい生活「幸せ」(読売新聞朝刊2010年6月10日付け)	<ul style="list-style-type: none"> ・茶の湯について調べる。 ・ブータン王国に関して調べる。 ・日本の鎖国について調べる。 その他:「世界不思議発見」(TBS 2009年1月10日放送)ブータン王国の回の録画を視聴。読んだものの映像と比べる。
2010年3学期	<ul style="list-style-type: none"> ・小説「ろくでなしのサンタ」(浅田次郎著『鉄道員』) ・CM天気図「福袋の先に」(朝日新聞朝刊2011年1月1日付け) 「時短は日本の競争力奪う!?(朝日新聞記事朝刊2011年1月8日付け) 「選ばれるより選ぶ力」(朝日新聞記事朝刊1月5日付け) 「いい会社、自分次第」(朝日新聞記事朝刊1月5日付け) 	サラリーマン川柳(第一生命HP) http://event.dai-ichi-life.co.jp/company/senryu/	

<p>2011年1学期</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「外見・趣味より経済力」(朝日新聞朝刊2011年4月3日付け) ・「婚活よりも自立」(朝日新聞朝刊2011年4月10日付け) ・「結婚するのが難しい時代」(朝日新聞be 2011年4月2日付け) ・天声人語 (朝日新聞朝刊2011年5月12日付け) ・「文化芸術 生きる必需品」望月京著 (朝日新聞朝刊2011年5月5日付け) ・「想定内に対処できず」専門家に聞くインタビュー記事 (朝日新聞夕刊4月19日付け) ・夏目漱石の生い立ち (日本語読解教科書『日本を知ろう 日本の近代化に関わった人々』(アルク)) ・「夢十夜」夏目漱石著から「第一夜」 ・「クレイグ先生」夏目漱石著 	<ul style="list-style-type: none"> ・「スマートフォンとケータイ」(朝日新聞小雑誌スタイルアサヒ連載記事「家電の告白」第2回2011年5月第20号) ・「冷凍室と野菜室」(朝日新聞小雑誌スタイルアサヒ連載記事「家電の告白」第1回2011年4月第19号) ・「夢十夜」夏目漱石著から「第三夜」 ・「モナリザ」夏目漱石著 	<ul style="list-style-type: none"> ・各国の結婚事情に関して調べる。 <p>創作活動：多読教材として使用したシリーズ「家電の告白」のスタイルを真似て、「冷凍室と野菜室」の会話を創作する。</p>
-----------------	--	---	--